

縄文時代後晩期の 土製垂飾類（玉類）について

—東海地域の事例から—

● 川添和暁

本稿は、研究上、主体的に取り上げられる機会の少ない、土製垂飾類についての集成と若干の考察を行うものである。土製垂飾類を1類から7類に大別し、1類は獣牙と、2類は植物種実との関連性を指摘した。一方、4類～7類は有孔球状土製品や岩偶岩版類・土版との関連も考えられ、性格が異なるようである。これら土製垂飾類は、土壌など保存条件に制約を受けることが少ないにも関わらず、地域的な分布に偏差が認められる。このことから、土製は骨角製や石製に対する単なる代用品ではなく、土製垂飾類が主体的に使用される場合があったのではないかと推測した。

1. はじめに

縄文時代の玉類の研究では、石製品の事例がしばしば取り上げられる。保存条件に制約のあるおよび貝類を含めた骨角製品（骨角器）や植物質資料含めて、実際にはさまざまな素材で玉類が製作・使用されていたことが想定される。

本稿は、石製品とともに保存条件に制約されることのない土製品について集成と若干の論考を加えるものである。ここでは比較的小型の法量で、玉様の形状を呈するものを取り扱うが、実際には垂飾ではないものも包含している可能性がある。異論もあろうが、本稿ではそれも含めて、一旦土製垂飾類と称する次第である。

2. 研究小史

垂飾に関しては、近代考古学以降、古墳時代の勾玉について早くから注目が集まり、坪井正五郎以来、その起源・系統を探る上での原始勾玉（大野 1896・1916）や石器時代の勾玉（高橋 1916）などの研究があった。

装身具類全般について総合的に初めてまとめた樋口清之は、垂飾を形状からA型～M型に大別した。B型（曲玉形）では土製を石製の模倣と位置づけた。H型（白玉）・I型（丸玉）・J型（管玉）では石製・骨角製・土製があり、土製には各種文様や顔料塗布などが施されているという。特にI型（丸玉）の分布は極めて広

く、東北から九州地域に無数存在するとした。

土製の装身具といえば、滑車型をはじめとする耳飾りの研究が主体である。垂飾に関して言えば、石製垂飾に付随して簡単に述べられる場合が多く、概説書などでもその傾向を窺うことができる（江坂 1964・藤田 1989 など）。

今回取り扱う資料について、伊藤正人は直接的な言及をした。伊藤は、非翡翠石製玉類集成を行なう中で、比較資料として愛知県内の土製垂飾出土遺跡地名表と集成図を呈示した（伊藤 2005：28～29頁）。様相と傾向について簡潔に述べているので、以下に抜粋・引用する。

・数が少ないながら、かなり規格性が高い印象を受ける。有文のものが5点あり、・・・これらはいずれも紡錘形の管玉状を呈するが、文様には共通性は認められない。無文のものは、大半が雑な作りで、指圧痕・手握痕を残すものが多い。勾玉・丸玉・管玉の他、石製には見られない長軸穿孔した円盤状の扁平な玉もある。・・・山間部では出土例を確認しておらず、沿岸部・低地部に偏した顕著な分布傾向を示している。【28頁4行～9行】

土製垂飾類を資料群とした分析事例は極めて少ない。これは、一見形状が単純であることや、特定石材の石製垂飾のように原産地を起点とする広域的研究に発展しない点などの要因がある上に、形状が類似する他器種との峻別の難しさであろう。議論を進めるためにも、本稿では孔が設けられている小型の資料を、まずは対象資料として集成・検討を行うことにしたい。

表 1 東海地域縄文時代後晩期土製垂飾類出土一覧（遺跡の番号は図2と一致）

番号	遺跡名	所在地	時期	1類						2類					3類			4類			5類		6類	7類	遺跡別計	文献				
				1a	1b	1c	1d	1e	1f	2a1	2a2	2b1	2b2	2c1	2c2	3a	3b1	3b2	3c	3d	4a	4b	4c	4d			5a	6a1	6a2	7a
1	前山遺跡	静岡県浜松市	晩期前半?																									1	鈴木編1992	
2	牛堀内遺跡	岐阜県高山市	後期～晩期									1						1										2	上嶋編1998	
3	西田遺跡	岐阜県高山市	後期中葉～晩期	1		1						3																6	谷口編1997	
4	中村遺跡	岐阜県中津川市	後期～晩期									1					1											3	住田ほか1979	
5	大平遺跡	愛知県一宮市	晩期中葉												1													1	伊藤編1990	
6	牛牧遺跡	名古屋守山区	後期末～晩期末			1									2													3	川添編2001	
7	玉ノ井遺跡	名古屋市熱田区	晩期前半	1													1											2	藤編2003	
8	大曲輪遺跡	名古屋市瑞穂区	晩期前半?														1			1								2	小栗1941	
9	重貝塚	名古屋市緑区	晩期前半?									2		3														5	清野1969	
10	本刈谷貝塚	愛知県刈谷市	晩期前半																	1								2	加藤・斎藤1972	
11	八王子貝塚	愛知県西尾市	後期中葉																									1	松井編2003	
12	枯木宮貝塚	愛知県西尾市	晩期前半									1		2	1													5	松井編2007	
13	神郷下遺跡	愛知県豊田市	晩期前半												1													6	大橋・杉浦1974 磯谷・田嶋1975	
14	御用地遺跡	愛知県安城市	晩期前半																									2	岡安ほか1996	
15	真宮遺跡	愛知県岡崎市	晩期				1																					1	斎藤編2001	
16	平井稲荷山貝塚	愛知県豊川市	晩期									1																2	清野1969	
17	白石遺跡	愛知県豊橋市	晩期前半?																									1	贊編1993	
18	麻生田大橋遺跡	愛知県豊川市	晩期後半～弥生前期										1								1							6	安井編1991 前田編1993	
19	天白遺跡	三重県松阪市	後期後葉～晩期初葉				2						4	1														12	森川編1995	
20	下沖遺跡	三重県松阪市	後期後葉～晩期初葉																									1	和氣2000	
21	森添遺跡	三重県度会郡度会町	後期後葉～晩期末				1																					3	奥・御村・田村2011	
分類別計				2	2	4	1	1	1	15	4	6	1	2	2	10	1	1	1	1	3	1	2	1	1	2	1	1	合計67	

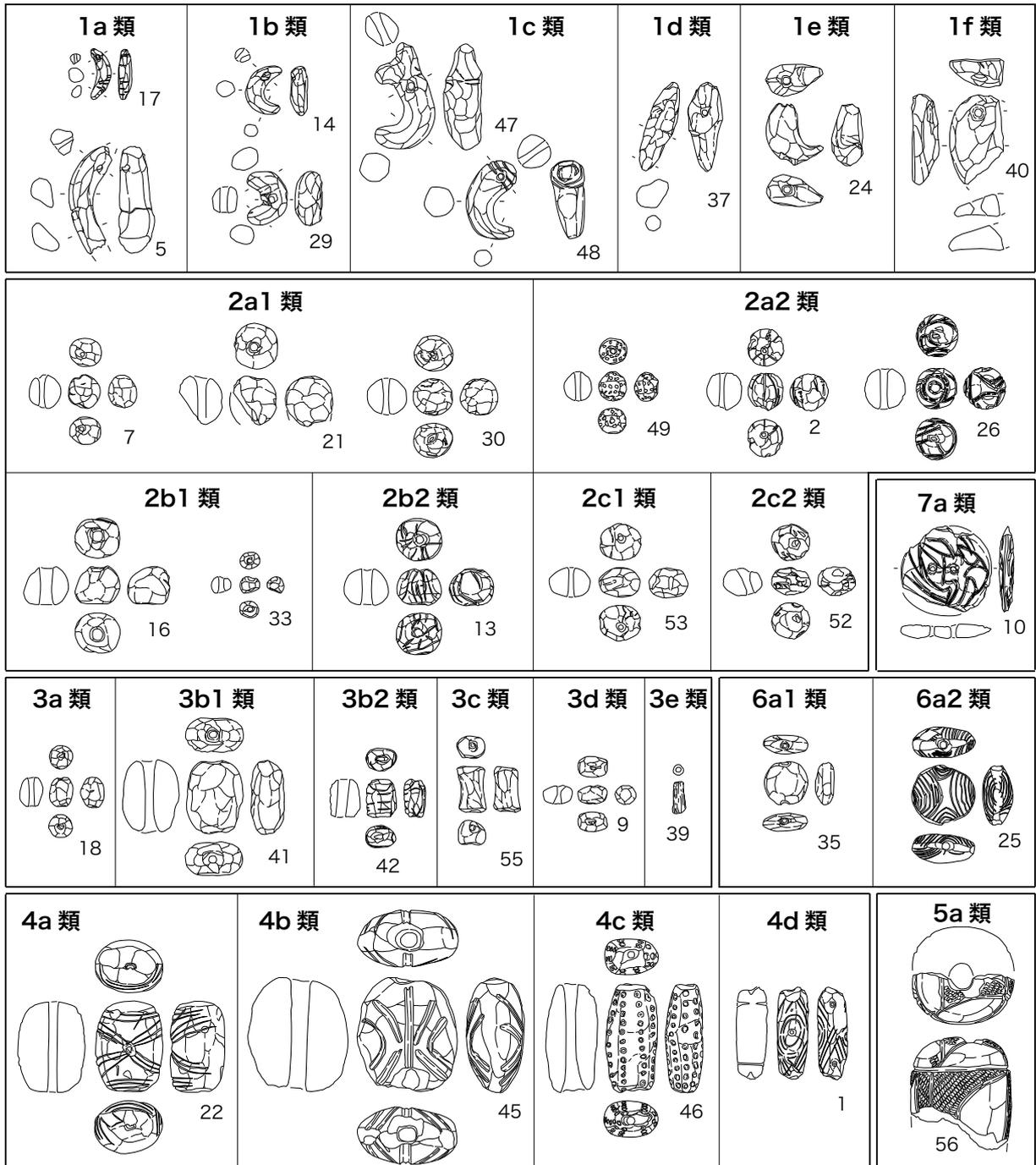


図1 東海地域縄文時代後晩期土製垂飾類分類図（図の縮尺は3分の1、番号は図3～7と共通）

3. 資料の分析

a. 分布

対象地域では、21 遺跡、67 点の資料を確認した。遠江地域では1 遺跡1 点、尾張地域では4 遺跡12 点、三河地域では9 遺跡26 点、美濃地域では1 遺跡3 点、飛騨地域では2 遺跡3 点、伊勢地域では3 遺跡16 点ある。飛騨地域における西田遺跡、伊勢地域における天白遺跡と、後期後葉に盛行する遺跡では、一遺跡からの出土点数が5 点以上と多い傾向がある。晩期では、一遺跡で5 点以上出土する遺跡には、雷貝塚・枯木宮貝塚・神郷下遺跡・麻生田大橋遺跡があり、名古屋台地南部から三河地域にかけての範囲に当たる。

より詳細に分布傾向を見ていくと、これまで渥美半島域では1 点の出土も確認されていないことが了解できる。換言すると、川地貝塚・吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚ではこの類例が確認されていないことを示しており、土製装身具類の位置づけを考える上で、非常に興味深い現象である。

b. 形態

資料群は、立体的形状などから、しの字状など屈曲を呈する1 類、球状などを呈する2 類、柱状を呈する3 類～5 類、扁平・厚手の円盤状を呈する6・7 類の7 群に大別できる。それぞれの大別分類の中で、さらに形状あるいは穿孔位置・方向、沈線文様の有無などから、小分類を行なった。以下、その詳細を示す。

○1 類 (しの字状) 平面形状の特徴で集めた部類である。

1a 類 (5・17) * 牙製垂飾の形状により近いものである。5 はイノシシ雄犬歯を模したものと考えられる。東海地域の事例では弥生時代の資料になるが、朝日遺跡で該当部位および形状の骨角製装身具が出土する (川添 2009)。両端に穿孔があつて、半環状を呈するものかもしれない。18 は瀨瀨 茂がすでに紹介しているようにイヌ犬歯に近い形状を呈するものである (瀨瀨 2002)。

* 以下、番号は図3以降の番号と同一である。

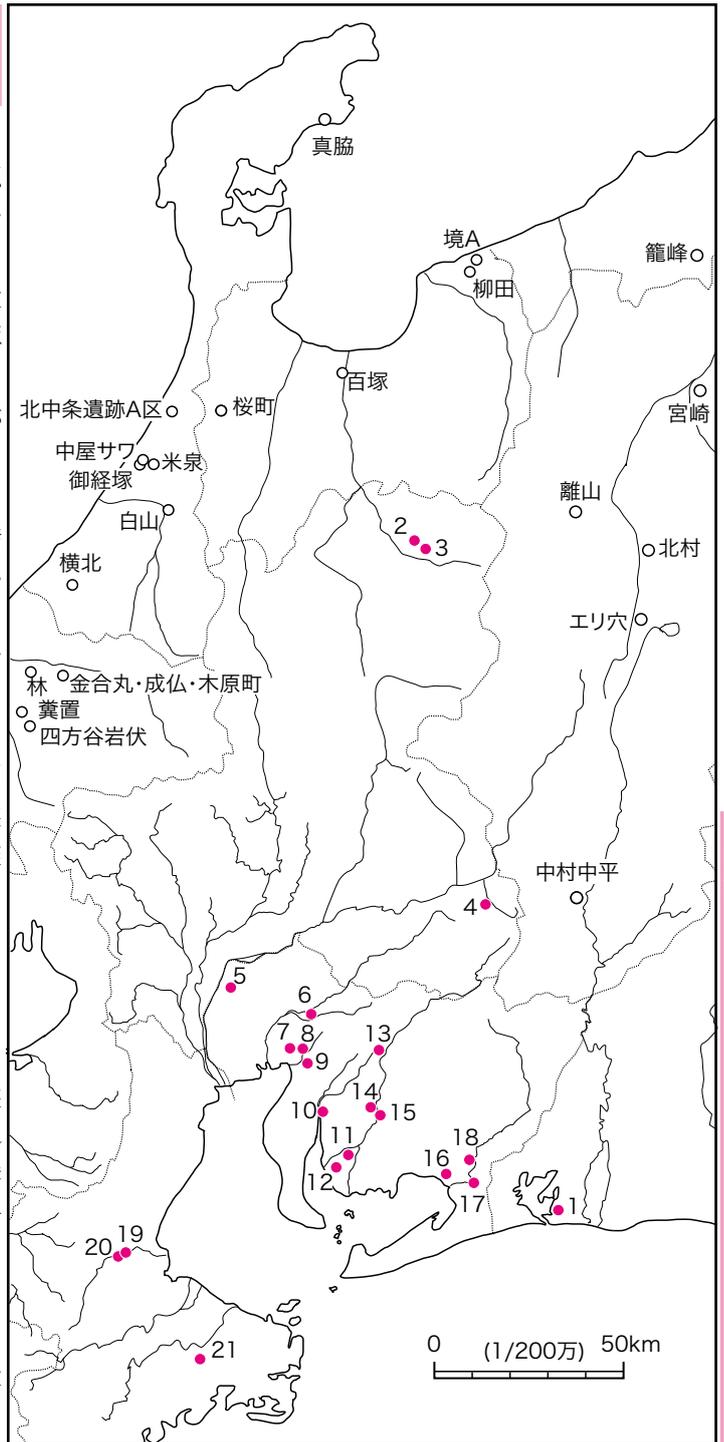


図2 東海地域縄文時代後晩期土製垂飾類出土位置図 (番号は表1と一致)

1b 類 (14・29) 勾玉状を呈するもので、屈曲した形状以外は、装飾などが確認できないものである。

1c 類 (4・47・48・58) 勾玉状を呈するもので、1b 類より複雑な形状を呈するものである。4 は屈曲中央部がやや膨れる形状を呈す

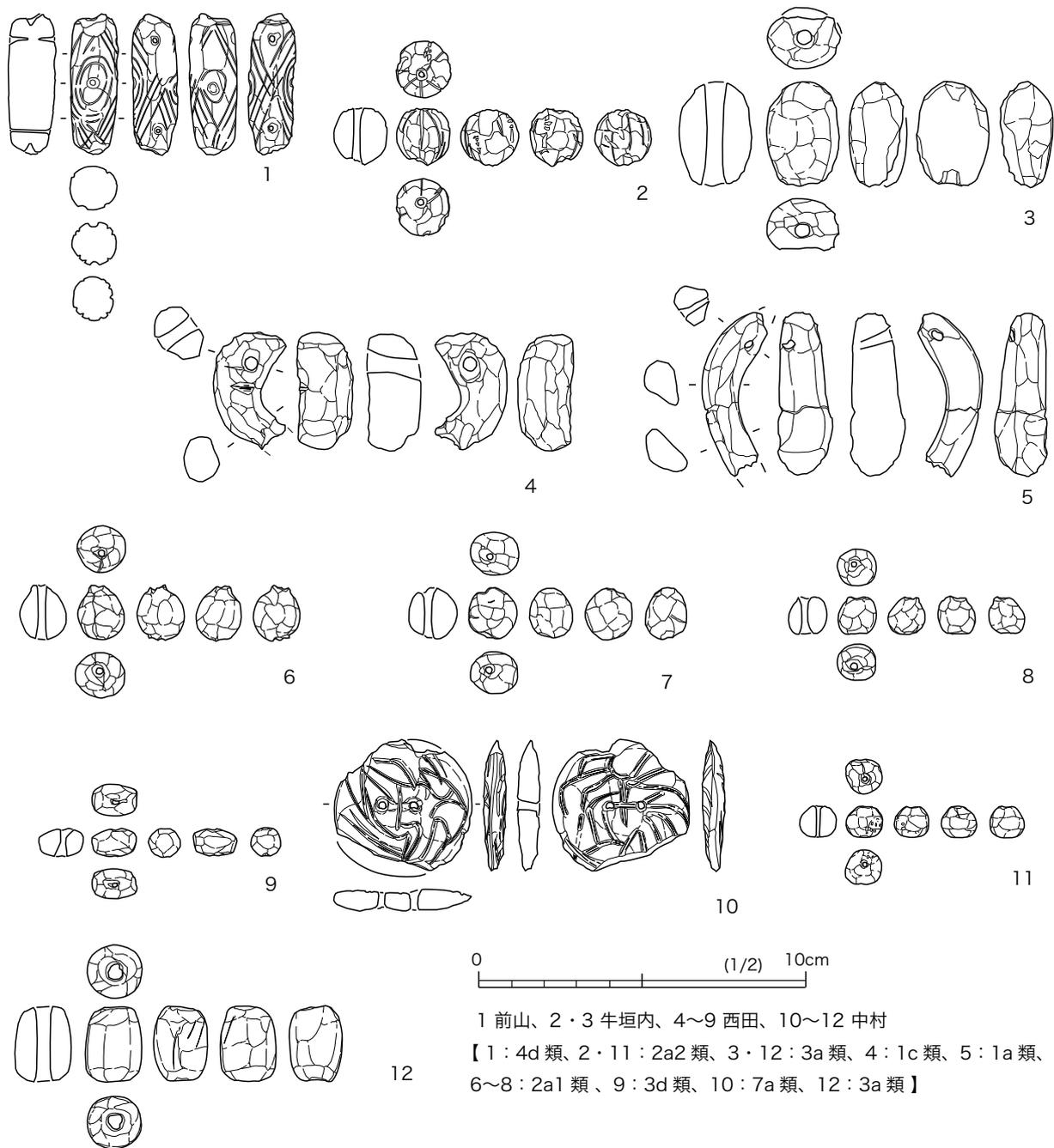


図3 東海地域縄文時代後晩期の土製垂飾類 I

るものである。47は穿孔部側の端部に凸状の突起が付けられている。48は穿孔部側の端部に同心円状の沈線が3条巡るものである。

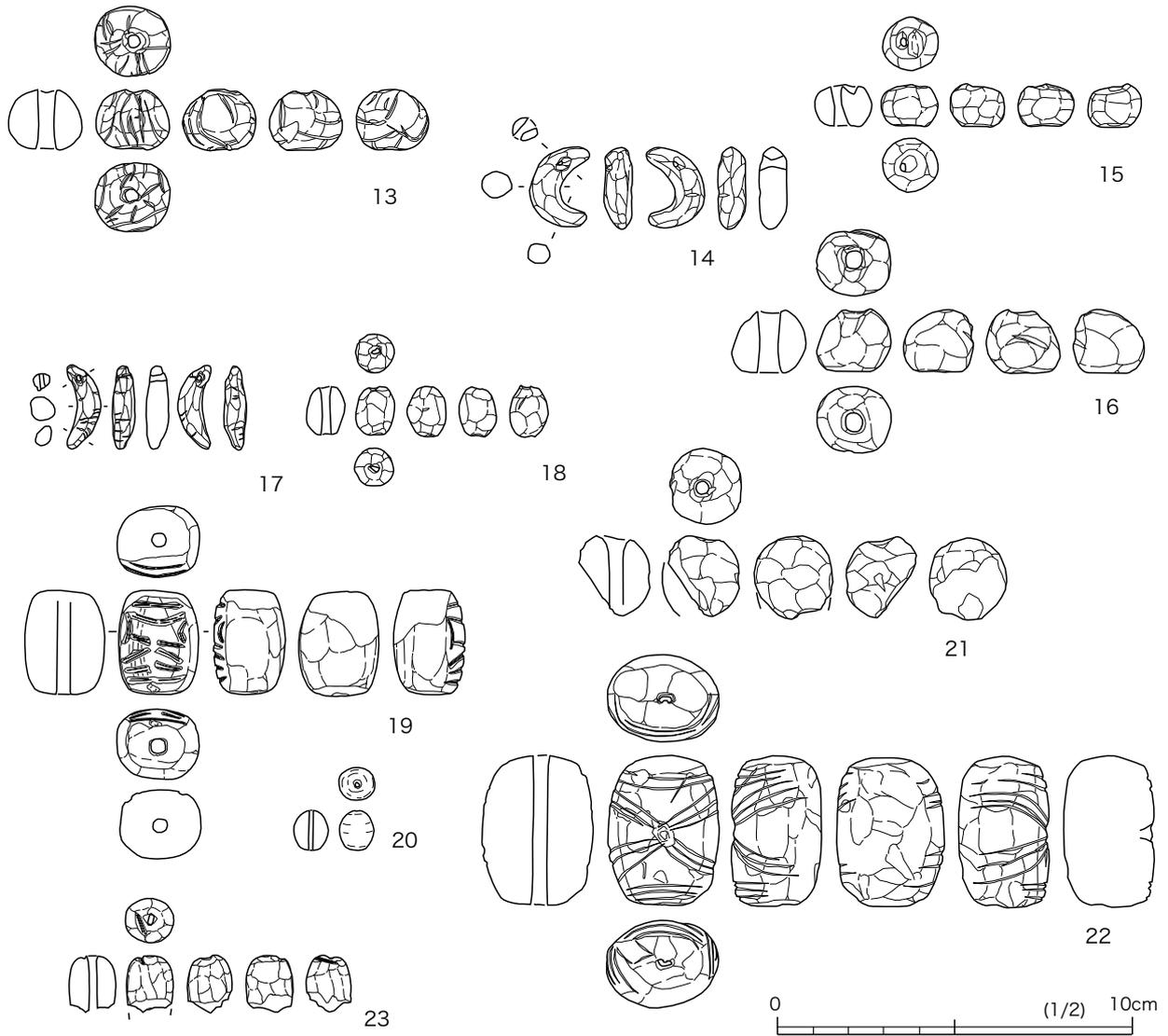
1d類 (37) 先端部が尖るような形状である。穿孔部周囲が、焼成後に剥がれた様子を呈し、穿孔は焼成後に行なわれるなど、やや特異な状況が認められる。

1e類 (24) 長軸方向に貫通孔が認められるものである。

1f類 (40) 断面形状が扁平な三角形を呈するもので、一側辺が緩やかな曲線を呈するものである。

○**2類 (球状)** 平面形状では円に近い形状を呈するものである。

2a1類 (6～8・27・28・30～32・50・51) 球に近い形状を呈するものである。器面にはユビオサエなどの調整が加えられたままの状態のものが多い。これに該当するものは



13 大平、14~16 牛牧、17・18 玉ノ井、19・20 大曲輪、21・22 本刈谷、23 八王子

【13：2b2類、14：1b類、15・16：2b1類、17：1a類、18・20・21・23：3a類、19・22：4a類】

図4 東海地域縄文時代後晩期の土製垂飾類2

計15点あり、全資料の22.39%と最も多い。

2a2類 (2・11・26・49) 2a1類同様に球に近い形状を呈するもので、沈線および刺突などが施されているものである。2は孔部分から放射状に細沈線が垂下するもので、一部は不連続な刺突列様を呈する。26は太沈線が巡るもので、同心円部を起点として縦横方向に沈線が枝のように伸びる。49は刺突列が全面に施されているものである。11も痕跡程度になってはいるが、器面に刺突列が認められるものである。

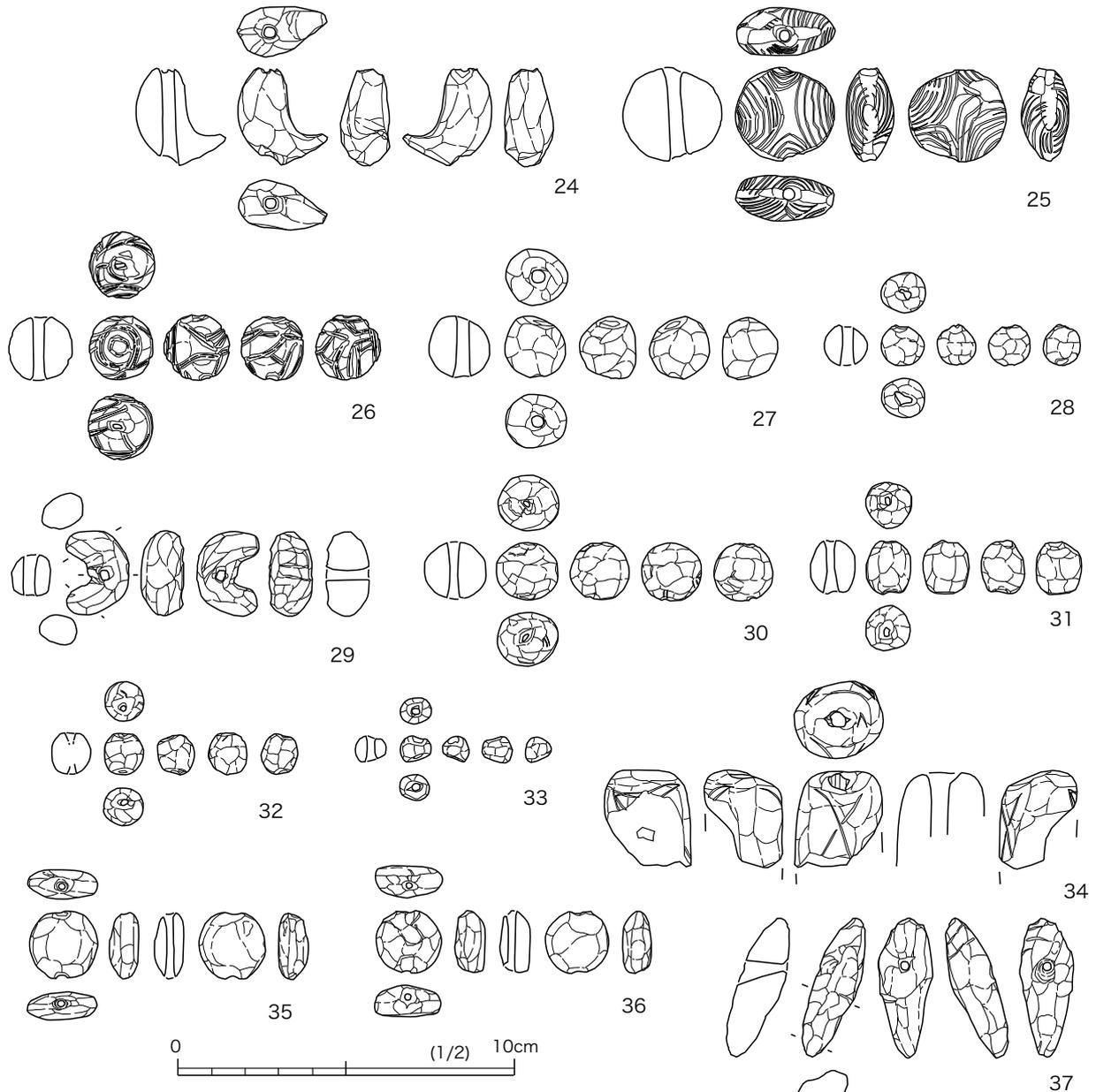
2b1類 (15・16・33) 球が若干歪む形状を呈するものである。実見し得た資料では、孔

部分の一端で平坦面を形成する部分が認められるものである。

2b2類 (13) 2b1類同様に球が若干歪む形状を呈するもので、13は2と同様に孔部分から放射状に細沈線が垂下するものである。

2c1類 (53・54) 球状が著しく潰れたような形状を呈するものである。53・54は球面に対して扁平な形状を呈するものである。平面が潰れた形状を呈するものの、53は正円形あるいは楕円形を呈する訳ではなく、一端凸部分が存在していることに注目したい。

2c2類 (52) 2c1類同様であるものの、短沈線が施されているものである。側面観を含め



24~28 枯木宮、29~34 神郷下、35・36 御用地、37 真宮

【24：1e類、25：6a2類、26：2a2類、27・28・30~32：2a1類、
29：1b類、33：2b1類、34：4a類、35・36：6a1類、37：1d類】

図5 東海地域縄文時代後晩期の土製垂飾類3

た形態としては54に極めて近い。

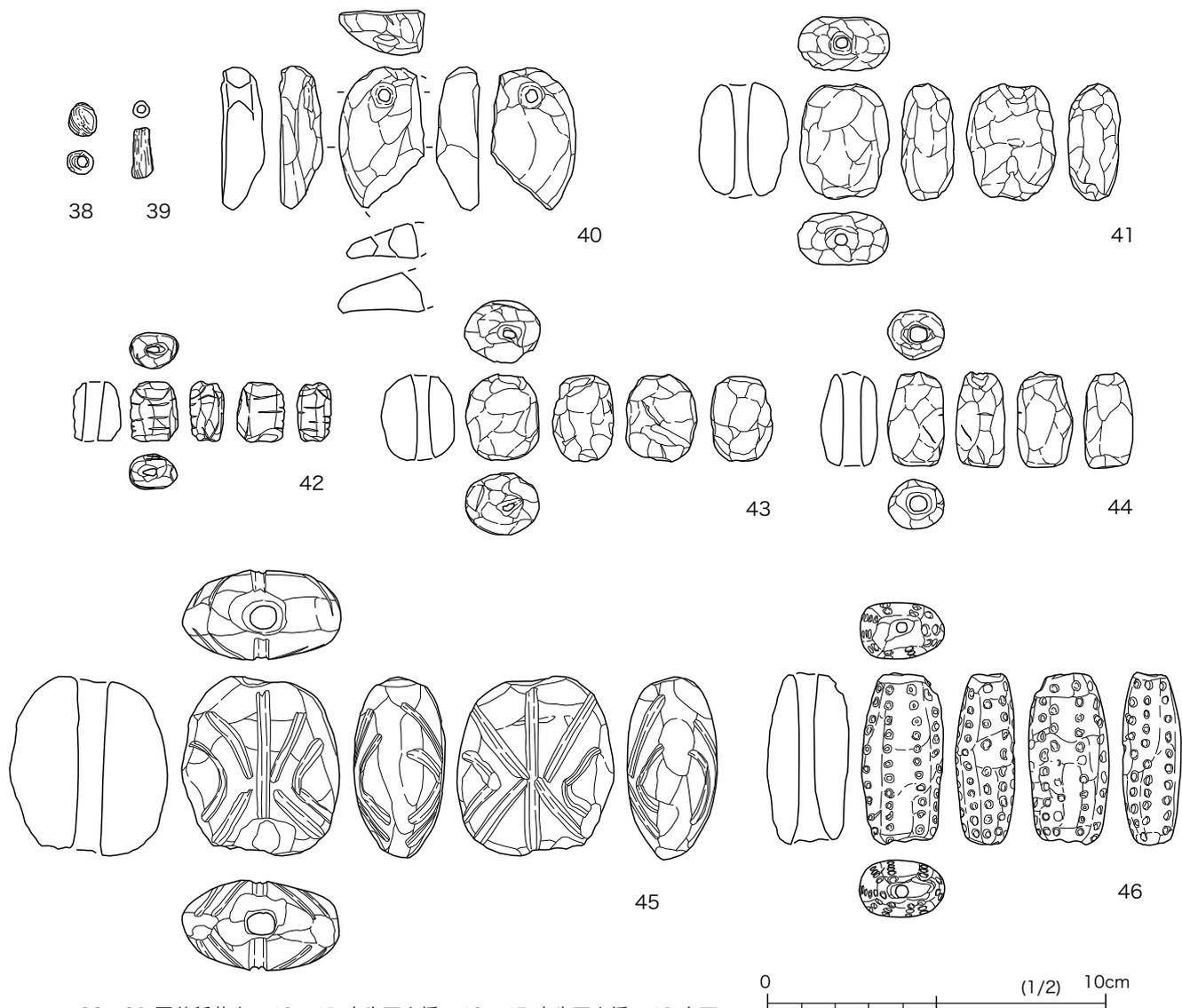
○3類 (柱状1)

3a類 (3・12・18・20・21・23・43・44・59・60) 平面形状が長楕円形あるいは隅丸方形を呈し、かつ断面形状が円形あるいは楕円形を呈するものである。一部2a1類との峻別が難しいものもあるが、平面の長さとの幅の比が1.25対1を基準として、より縦長のものを3a類、より横長のものを2a1類とした。

3b1類 (41) 平面形状が長楕円形あるいは隅丸方形を呈し、かつ断面形状が潰れたような形状あるいは平坦面が形成されているものである。

3b2類 (42) 3b1類の形状を呈するものに、細沈線による装飾が施されているものである。42は、横方向の短沈線を主体とし、端部には一部弧状沈線が認められる。

3c類 (55) 最小幅が胴部中央になる、鼓



38・39 平井稻荷山、40・41 麻生田大橋、42～45 麻生田大橋、46 白石

【38：2a1類、39：3e類、40：1f類、41：3b1類、42：3b2類、43・44：3a類、45：4b類、46：4c類】

図6 東海地域縄文時代後晩期の土製垂飾類4

状を呈する。断面形状は均一ではなく、図面上端側では楕円形状であるが、下端に向かうに従ってカマボコ状を呈するようになる。孔は長軸方向に施されている。

3d類(9) 最大径が胴部中央になる形状で、両端には平坦面が形成されている。孔は胴部中央の短軸方向に施されている。

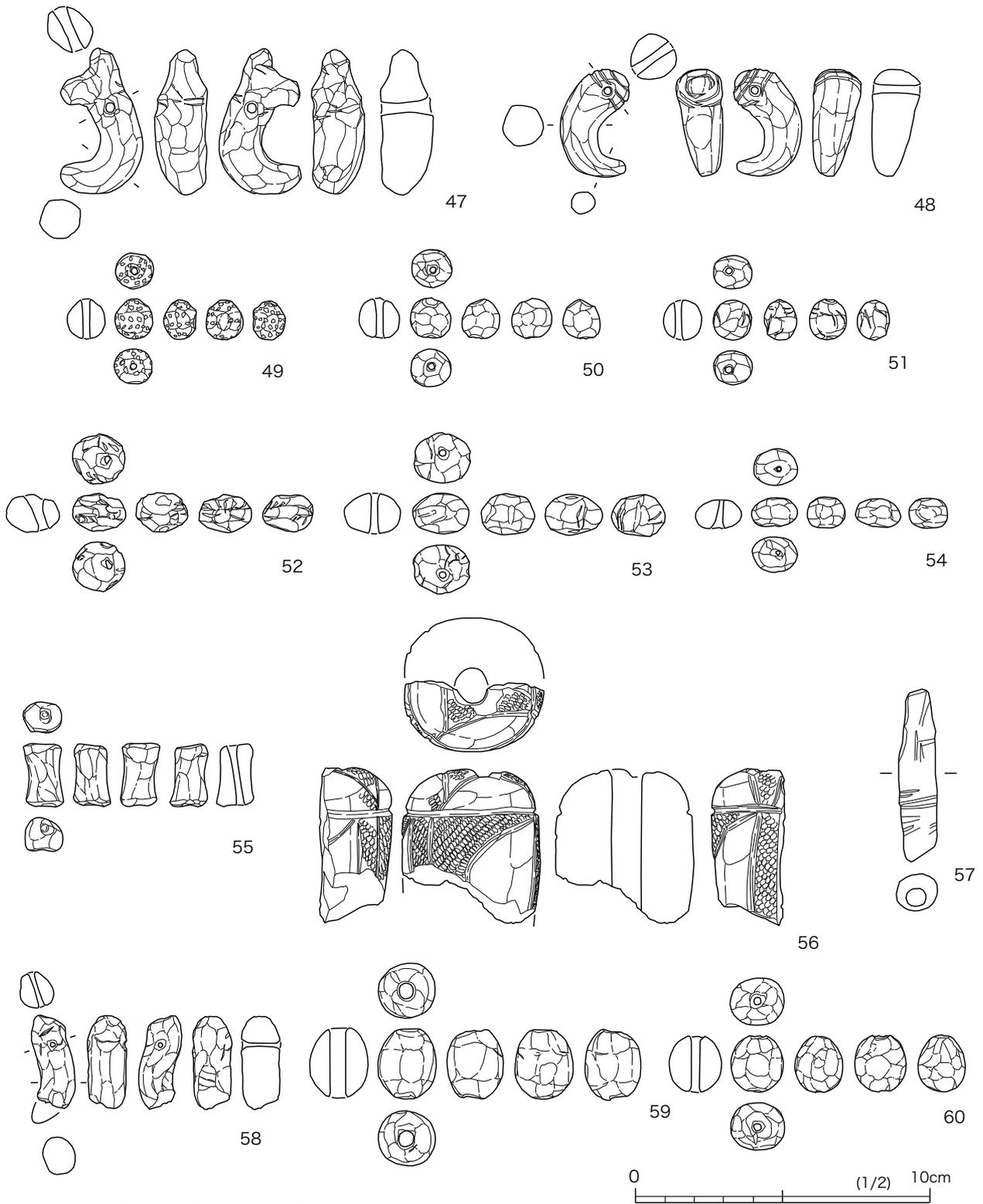
3e類(39) 長い円錐形の端部側が切断されたような形状で、管状を呈するものである。

○4類(柱状2) 大型で装飾程度の高い一群である。

4a類(19・22・34) 形状は3a類と同一である。19は横方向の短沈線を主として、弧

線などが配されている。端部に刺突も施されている。22は中央の刺突を基点として×状に沈線が3条一単位で施されており、加えて端部の一方には2条、別の端部には3条一単位の短沈線が施されている。長軸方向に施文と同一工具と考えられるので孔が施されているが、半截竹管状の工具で行ったことが窺えられるもので、孔による隙間は極めて狭くなっている*。34は、

* 本稿の主旨から外れるが、注目すべきはこれを施文した工具についてである。この資料から、半截竹管文の施文工具には、長さ5cm以上の、断面形状の均一な工具が存在していたこととなる。筆者は以前、当地域の半截竹管文系条痕土器の施文工具には、巻貝工具が多用されていることを示したことがある(川添2011)。22は、それとは別の、まさに半截竹管状工具が存在していたことを示す資料として重要であろう。



47~56 天白、57 下沖、58~60 森添

【47・48：1c類、49：2a2類、50・51：2a1類、52：2c2類、53・54：2c1類、55：3c類、56：5a類、57：4c類、58：1c類、59・60：3a類】

図7 東海地域縄文時代後晩期の土製垂飾類5

両面に細沈線による装飾が施されたので、残存部分が多い側は×状、欠損部分が多い側は2本一単位で横沈線と×状に引かれたものと推測される。

4b類(45) 形状は3b1類・3b2類と同一で、特に装飾がある点では3b2類との関係が強いものである。器面両面には同様の太沈線による装飾が認められ、長軸方向の沈線に対して斜方向の短沈線および弧線が放射状に配される。

4c類(46・57) 形状は3b1類・3b2類に関連するが、幅に対して長さがより長いものである。46は全面に竹管状工具による刺突列が長軸方向に10列施されている。長軸方向に孔は認められる。

4d類(1) 棒状を呈するもので、長軸方向に貫く孔はなく、両端に短軸方向に細い孔が2カ所認められる。器面中央両面に盲孔状の凹みがあり、これを起点として弧線あるいは斜方向に細沈線が配される。端部両端にも盲孔状の凹みが認められる。

○5類(柱状3)

5a類(56) 大型の柱状の器面に文様が施されているもので、有孔球状土製品に類似するものと考えられる。56は平面と上面に沈線区画内に縄文LRが充填されている。

○6類(盤状1)

6a類(35・36) 平面形状円形の盤状の形を呈したもので、長軸方向に貫くように孔が施されているものである。

6b類(25) 形状は6a類と同一であるが、沈線による装飾が認められるものである。25は、細沈線による多重な弧線群が平面では対向するように、側面では入り組むように配されている。対向する弧線群は両面で45度傾く位置に配されている。

○7類(盤状2)

7a類(10) 薄い盤状を呈するもので、中央に2カ所の小さい孔が認められるものである。この2カ所の小孔と中央の短沈線を起点として、複雑な弧状群が入り組むように配されている。

c. 法量

図8は、長さ・幅での法量散布図である。

最左上は全資料の状況、その他は各大分類別を示したものである。1類は長さ2cm以上・幅3cm以下、2類は長さ・幅ともにおおむね2cm以下、3類は長さ3.5cm・幅3cm以下、4類は長さ3～5.5cmの範囲、6類は径がおおよそ2～3cmの範囲にまとまっている様子をみることができる。この散布図で窺えられることに、2類と3類の類似性と、これに対する1類および4類それぞれとの背反性とがある。また、4類に対しての5類、6類に対しての7類は、ともに法量が突出して大きくなるものと考えられ、それぞれは全く別性格の道具であることが想定できる。

d. 沈線装飾など

沈線などの装飾が認められるものは、1b類・2a2類・2b2類・2c2類・3b2類・4a類・4b類・4c類・4d類・5a類・6a2類・7a類である。その中で、特徴的な装飾について取り上げる。

2a2類の2と2b2類の13は、孔方向に併行する細沈線が垂下する状況で、堅果類種実の縦線条を連想するものである。2c2類は幅太の水滴形の形状に沿って短沈線が認められるものである。形状と沈線装飾から植物種実の中でもクリが連想されるものである。2c1類の53も文様こそないものの同様の形状を呈しており、これもクリを模したものと考えられよう。

4類の装飾を分類すると、ア)1・22・34のように×意匠が主体となるもの、イ)19・45のように中央から側面側に展開する斜線あるいは弧線が認められるもの、ウ)46のように竹管状工具の連続刺突列が認められるものの、以上の三群に分けられようか。アは土器の文様のみならず石棒石刀類や一部の骨角器にも認められる装飾図柄である。イのような装飾効果は岩偶岩版類に類例が認められるものである(図9)。4b類の45に類似した形状・装飾として、3b2類の42を取り上げることができる。42には、上端部に弧状沈線が、側面にV状の沈線が認められ、これも岩偶岩版類に認められる意匠である。6a2類の25は、中央から側面側に展開する弧線という点、厚みの中央に孔が設けられている点などから、関東・東北地域など東日本域に認められる土版との有機的関係が窺えられ

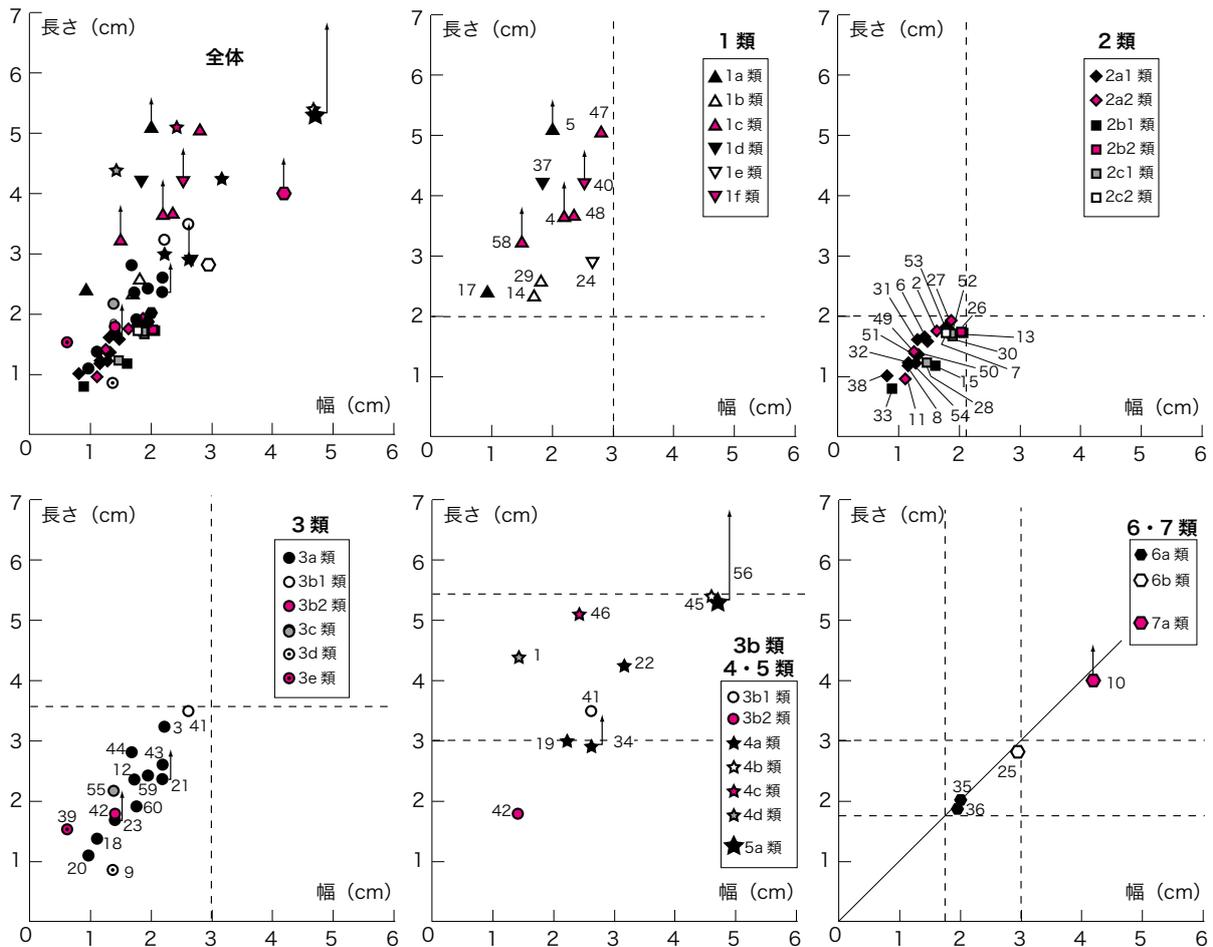


図8 土製垂飾類法量散布図

るものである。但し、関東・東北地域の事例では平面形状は方形を呈する事例が多い。ウに関しては、半截竹管文系条痕土器が展開する晩期前半において、有文土器に一般的に認められる意匠である。

なお、沈線・刺突を主体とする装飾が多いなか、5a類の56は縄文による施文が施されている。また、7a類は、中央の小孔も含めて、特異な装飾が施されているものである。

e. 使用痕および欠損傾向

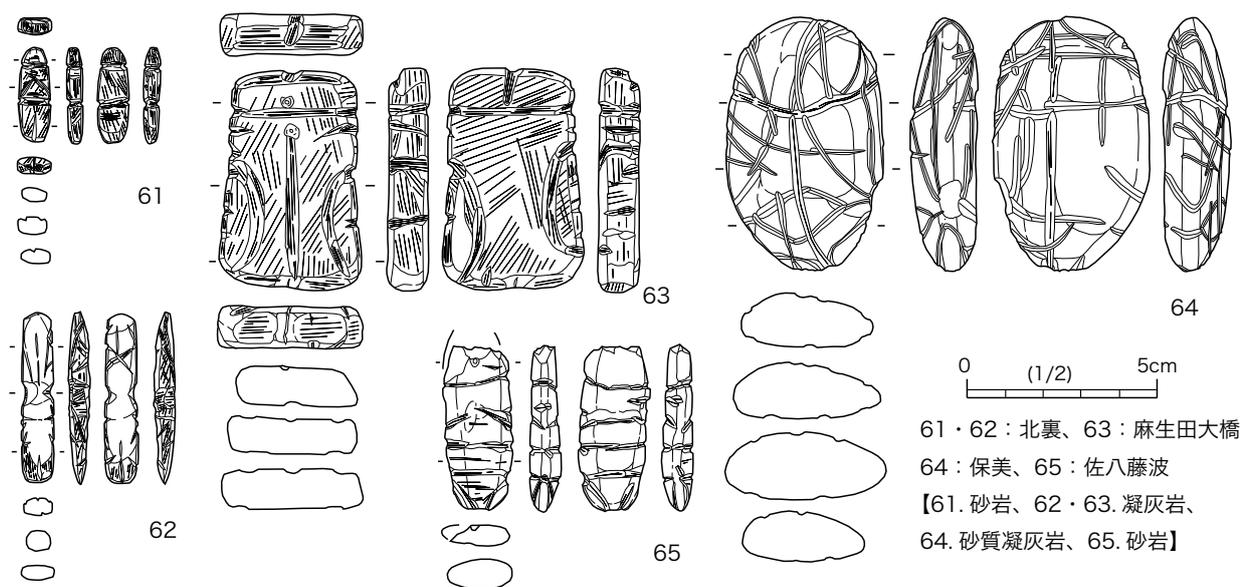
使用と考えられる痕跡には、孔周囲を中心とする磨滅や微細剥離、さらには形状の変化がある。これが明瞭に認められるものは、1類全般・2類全般・3a・3b1類・3d類・4b類・4c類・6a1類である。一方で、孔は施されているものの、紐などを通すことが難しいものとして、4a類の22や4d類の1などがある。孔は施さ

れているものの、垂下ではない別の意図で施された孔かもしれない。

また、大きく欠損した状態で出土したものには4・5・19・21・34・40・56・58で、恐らく57も該当する。このうち、4・5・40・58という1類のものは先端部が欠損したもので、当時は完存していたものの破損しやすい部分が欠失したのであろう。いずれにしても意図的な欠失といえるものは認められないようである。

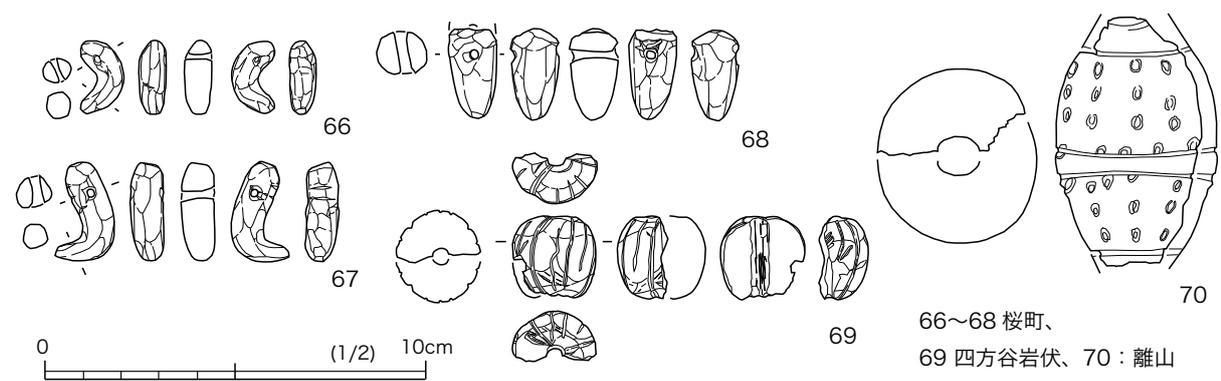
f. 遺跡内からの出土状況

これらの資料群の出土はいずれも包含層からの出土であり、特定遺構内からの出土が明らかになっているものはない。但し、同一遺跡から資料が複数点出土している場合は、形態と法量が類似するものである場合が多い。例を挙げると、西田遺跡の5～7、牛牧遺跡の11・12、御用地遺跡の25・26、麻生田大橋遺跡の29・



61・62：北裏、63：麻生田大橋、
64：保美、65：佐八藤波
【61. 砂岩、62・63. 凝灰岩、
64. 砂質凝灰岩、65. 砂岩】

図9 東海地域の縄文時代後晩期の岩偶岩版類 (川添 2010 を一部改変)



66～68 桜町、
69 四方谷岩伏、70：離山

図10 他地域の土製垂飾類 (70は穂高町1972より)

31・32、天白遺跡の33・34、36・37、39・40、などが好例で、枯木宮貝塚の17・18、神郷下遺跡の22～24も同様である。これらは各セットとして存在していたか、あるいは遺跡(活動集団)による一定の志向が存在していた可能性などが考えられよう。

g. 他地域との関係

土製装身具類では1類と2および3類は関東地域・北陸地域・関西地域でも広く認められるものである。図10の66～69は北陸地域の資料である。69のように、2類・3類に文様が認められるものでは、東海地域の資料と同様に、植物種実を模したのがある。

北陸および関東・東北地域では、有孔球状土製品の分布が知られている。今回の集成資料でも56はこの有孔球状土製品の範疇に入るもの

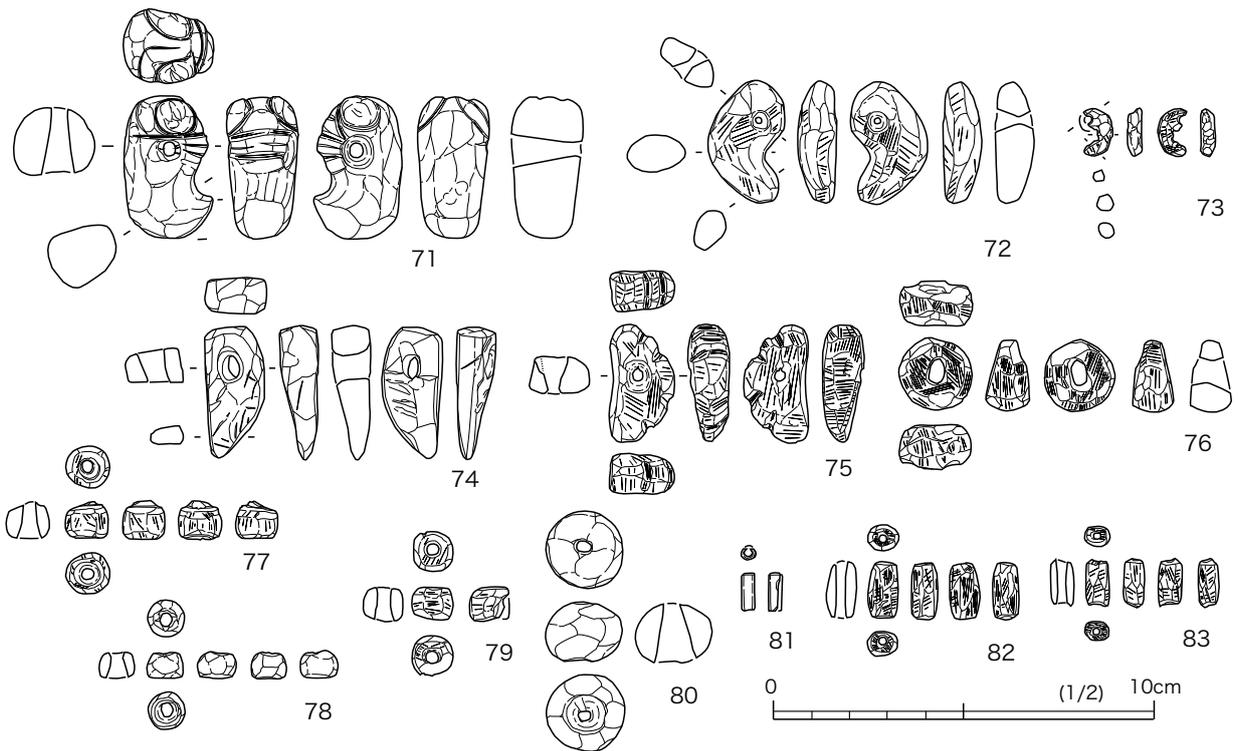
と考えられる。70も有孔球状土製品として紹介されているものである(小島1983など)が、垂下方向の竹管状工具の連続刺突列は、白石遺跡例(46)に極めて類似している。

4. 石製および骨角製垂飾について

ここでは、これまで見てきた土製垂飾と関連があると考えられる、異なる素材などの資料について言及したい。

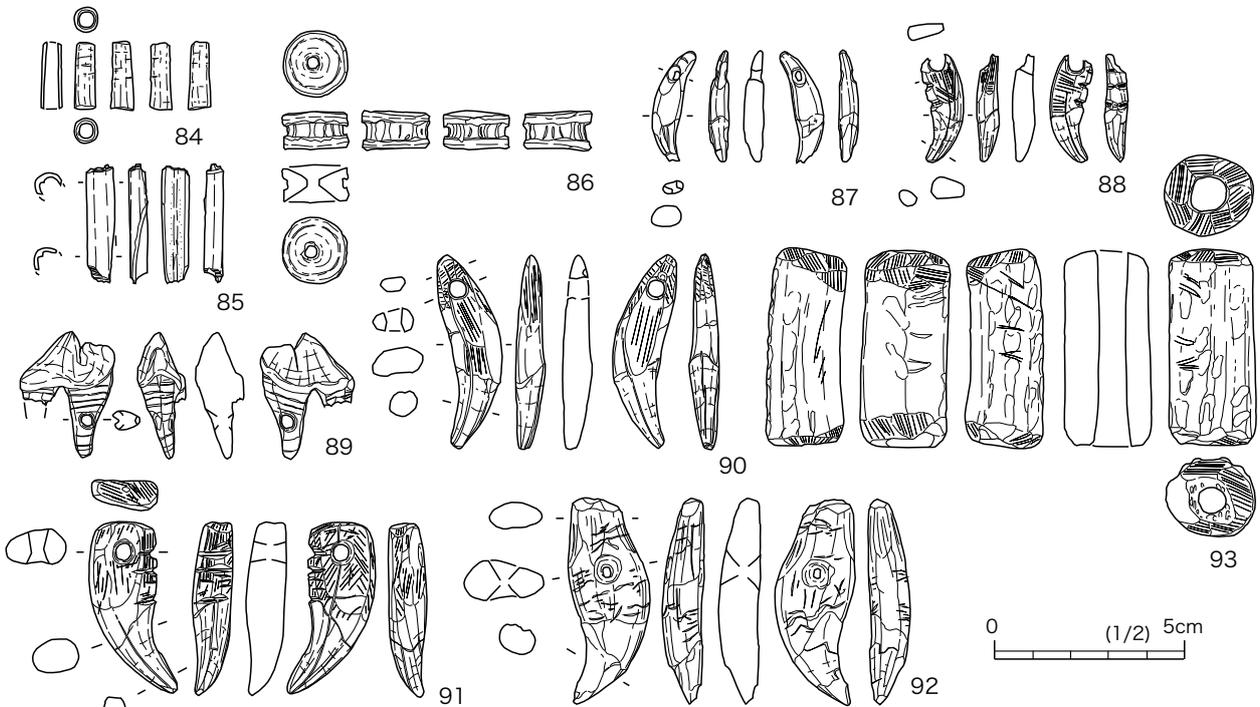
a. 石製垂飾

石製垂飾にも、しの字状(71～75)、球・柱状(77～83)、扁平円形など(76)という土製垂飾と同様な分類ができるようであるが、球・柱状については球状のものと柱状のものが明確に分類可能である。しの字状は、土製垂飾



71 森添、72・78・81 東光寺、73 落合、74 保美、75 笹平、76・79・82・83 麻生田大橋、77 玉ノ井、80 今朝平
 【71・72・75・78・80 ヒスイ、73・81 硅質岩、74・76・77・82・83 滑石、79 熔結凝灰岩】

図 11 東海地域縄文時代後晩期の石製玉類



84~86 玉ノ井、87・91・93 吉胡、88 保美、89 伊川津、90 枯木宮、92 平井稲荷山
 【84 ツノガイ類、85 鳥管状骨、86 軟骨魚類脊椎骨、87 イヌ上顎右犬歯、88 イヌ下顎右犬歯、89 オオカミ臼歯、
 90 オオカミ上顎左犬歯、91・92 ツキノワグマ下顎左犬歯】

図 12 東海地域縄文時代後晩期の骨角製玉類

同様に、側面観が一方に湾曲あるいは偏った形状を呈しているのを特徴とする。72は中央部がやや凸状を呈しており、29と形態が類似する。71の装飾は、上端に装飾のある47・48に通じるものがあるか。81～83は柱状を呈するもので、いわゆる管玉状である。幅1cm未満の資料が多く、細身である。76は平面形状が隅丸の多角形を呈するもので、側面観が扁平な扇状を呈して中央部に穿孔が施されているものである。平面形状・側面観・穿孔の様子などから、52・53に関係が深い資料と考えられる。石材は、ヒスイのほか、滑石・蛇紋岩・熔結凝灰岩・その他凝灰岩質などがある。

b. 骨角製垂飾*

この種の資料としては、牙製垂飾が多く知られる(87～92)。91・92はツキノワグマ犬歯製で、この牙製垂飾の中では最も大きい部類に入る。法量としては、33・34・42と類似すると考えられる。91は側面に、短軸(横)方向の線刻が連続して施されているもので、やや大型のイヌの犬歯にも同様の装飾が認められる(88)。87はイヌ上顎犬歯製で、纒纒の指摘の通り17と形態が類似する。これら牙製垂飾は、素材自体、側面観が湾曲している。しの字状とした土製・石製垂飾が同様の様相を呈するものは、やはり牙製垂飾を意識して製作されたからであろう**。86はサメ脊椎骨製である。中央に穿孔があるものの、その周囲には顕著な紐ズレ痕は観察できない。吉胡貝塚では清野123号人骨で、右側耳付近からの出土があり、耳飾りとして報告がある。84・85・93は管玉状を呈するものである。84がツノガイ類製、85が鳥骨製、93が鹿角製である。93のような鹿角製垂飾は、渥美貝塚群ではしばしば認められるものであり、以前、鹿角製装身具類J類として提示したものである(川添2013)。

5. 土製垂飾類の位置づけ

以上、東海地域で出土した土製玉類について

* これらの資料の詳細については、別稿での発表予定である。

** 側面観が不均等で、断面形状で片側に寄った形状を呈することは、牙製の素材とする垂飾により忠実であることを示している。この点、断面形状に偏りのない古墳時代の勾玉とは大いに異なる点である。

て、集成と若干の分析を行った。分類別にその他素材・器種との対応関係を勘案しながら分類別の性格をまとめると、図13ようになる。

ここで注目したいのは、1類と獣類牙との関係性、および2類と植物種実との関係性である。

土製1類と石製勾玉に関して、牙製垂飾の形状に近いことは、先に述べた通りである。

一方、2類と植物種実との関係は、直接的には文様などの装飾が施されているものについて言及可能である。しかし、素文の52と53に関しても、形態上植物種実を意識したものの考えられるものが存在することから、実際には、2類の多くがこの志向に基づいている可能性もある。2類の存在は、現状では確認されていない、植物種実を用いた装身具類の存在を示唆する意味でも興味深い。

装身具と着装意義について述べた山田康弘は牙や爪などを素材にしたものは男性に、貝などは女性に多いという(山田2008)。このように、1類は男性あるいは狩猟に関係するものだとすると、一方2類は植物質食料利用に関係するものといえる。さらに、2類は女性に関するものとの予察も述べることもできるが、現在のところ2類・3類、あるいは植物種実を素材とした装身具と埋葬人骨との着装事例は、管見に及ぶ限りで把握していないことから、保留にしたい。

4類から7類は、有孔球状土製品や岩偶岩版類、あるいは土版との関係が認められるなど、上記1～3類とは、性格が異なるものである。但し、背景・系譜が異なりながらも、使用状況などから、全てにおいて垂飾などの装身具様の使用はなかったとは断言できないことも、併記しておく。

東海地域内ではあるが、今回の集成で、興味深い地域的な出土傾向を把握することができた。最も強調すべき点は、これまで渥美半島域で1点の出土も確認されていないことである。渥美半島では、吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚・川地貝塚など、戦前から繰り返し調査が行われているにも関わらず、現在に至るまで未確認である。土製は土壌などの保存条件に制約を受けることがないため、渥美半島域では土製垂飾類の使用は稀少であったとみてよい。

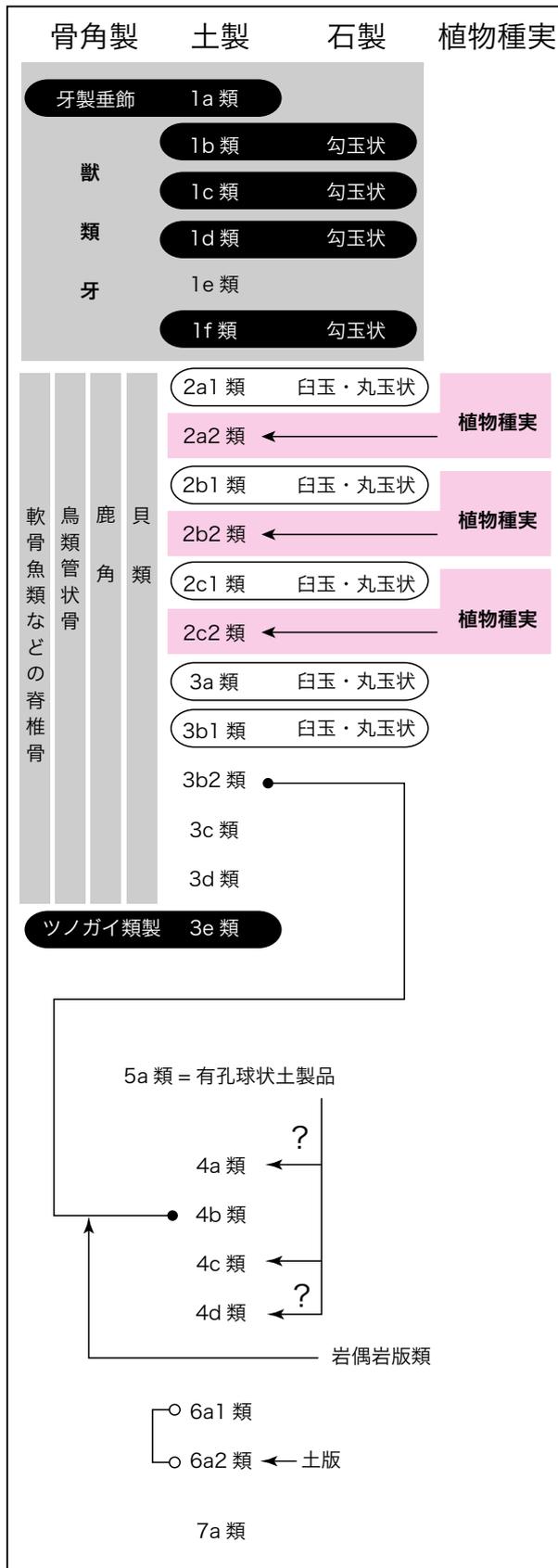


図13 土製垂飾類を中心にみた他素材・器種との対応関係

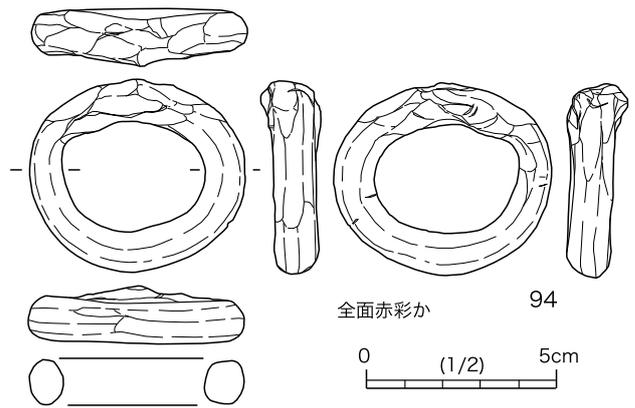


図14 玉ノ井遺跡の貝輪形土製品

その反面、西三河地域での出土は多く、その中でも6類は、安城・西尾市域と、低地あるいは沿岸部に偏るようである。

名古屋台地に所在する玉ノ井遺跡では、牙製垂飾は現在まで認められないものの、17のような土製垂飾が存在する。同様に、同遺跡では貝輪の出土は認められないものの、貝輪形をした土製品の存在が認められる(94)。貝層が形成・残存している遺跡であるので、骨角製が残存する条件でありながら、それが認められず土製品のみ存在することに注目すべきである。この点は、先に述べた渥美貝塚群の様相とは真逆である。この事例が玉ノ井遺跡に特化した現象かは、今後も引き続き検討が必要である。名古屋台地でも天白川を挟んで南東側に位置する雷貝塚では、イノシシ下顎切歯製垂飾や貝輪の出土もあり、状況は異なるようである。

土製装身具類は、他素材の代用品としての位置付けがしばしば述べられてきた。代用品としての製作・使用の場合、その場面が重要であろう。玉ノ井遺跡のように意図的に土製を選択・使用されたと考えられる場合があるからである。現在までのところ、埋葬人骨との共伴出土が認められないことが、骨角製および石製の最大の相違点である。装身具として着装されたものもあるかもしれないが、儀器的な使われ方がより多かったかもしれない。

6. 今後の課題

本稿では、垂飾(玉類)の中でも、土製についての集成と若干の予察を行なった。土製の玉

類は、縄文時代のみならず、弥生時代でもその存在を確認することができる（図15）。95は1類に相当するもので、側面観が一方に偏った形状は、牙製垂飾の様相を反映させたものと考えられる。97・98は2類に相当するものである。97は平面形状が潰れた水滴状を呈しており、植物種実の形状に近いように見える。96は紡錘形を呈するもので、縄文時代には認められなかったものである。これらの事例を併せて検討することで、1類・2類の背後にある、狩猟および植物質利用の社会的事情を、弥生時代においても考えることができるかもしれない。

【謝辞】 本稿を草するにあたり、以下の方々からご教示およびご配慮を賜った。ここに謝意を表する次第である（五十音順・敬称略）

伊藤正人・鶴飼堅証・大野淳也・長田友也・川合 剛・増山禎之

【資料の所蔵など】 1. 浜松市教育委員会、2～9. 岐阜県文化財保護センター、10～12. 中津川市教育委員会、13. 一宮市教育委員会、14～16・40・45・63・72・76・78・79・81～83・95～98. 愛知県埋蔵文化財調査センター、17・18・77・84～86・94. 名古屋市教育委員会、19. 名古屋市博物館、20. 小栗1941より、21・22. 刈谷市教育委員会、23～28・90. 西尾市教育委員会、29～34・73・80. 豊田市教育委員会、35・36. 安城市教育委員会、37. 岡崎市教育委員会、38・39. 清野1969より、41～44. 豊川市教育委員会、46. 豊橋市教育委員会、47～56. 三重県埋蔵文化財センター、57. 和気2000より、58～60・71. 度会町教育委員会、61・62. 可児市教育委員会、64・74・93. 南山大学人類学博物館、65. 伊勢市教育委員会、66～68. 小矢部市教育委員会、69. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、70. 穂高町教育委員会1972より、75. 設楽町奥三河郷土館、87～89・91. 田原市教育委員会、92. 天理大学附属天理参考館

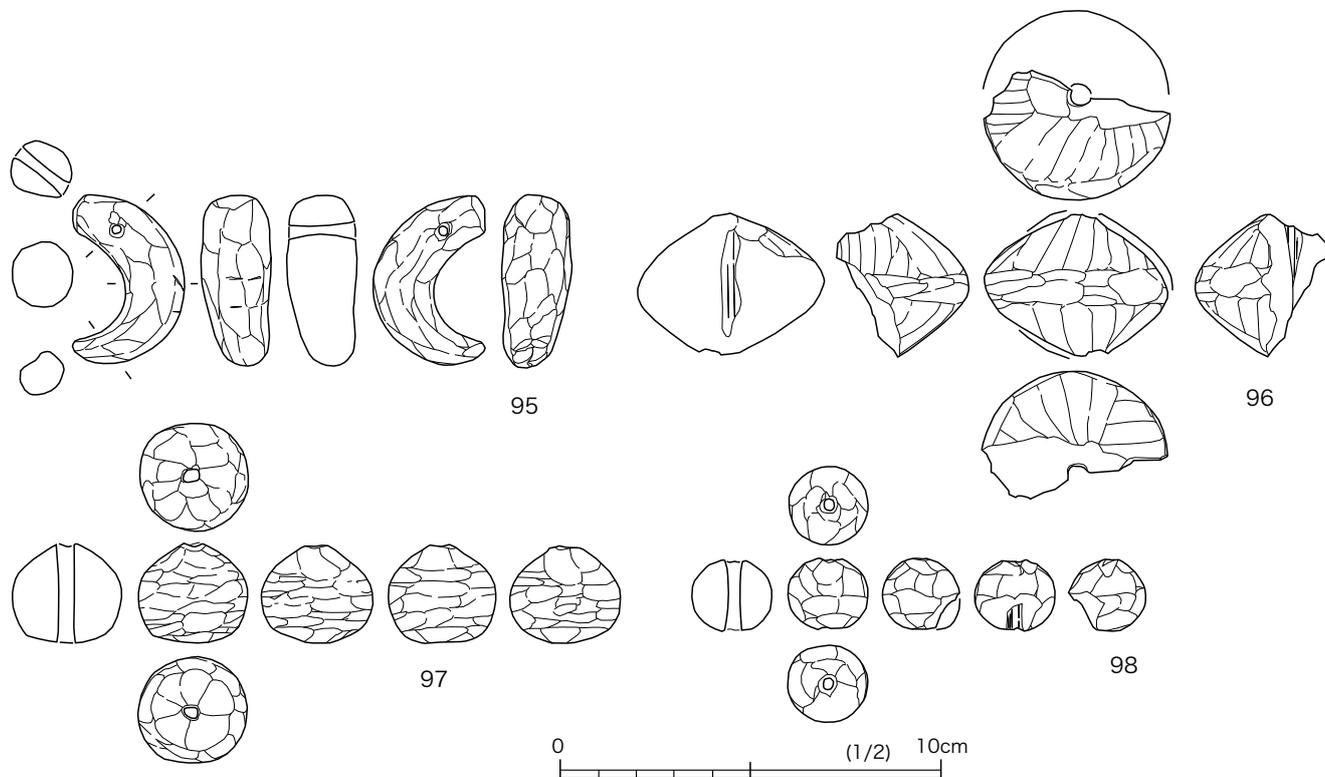


図15 朝日遺跡出土 土製装身具類（弥生時代）

参考文献

- 伊藤正人 2005 「愛知県縄文時代の非翡翠石製玉類集成」『三河考古』18 21～32頁 三河考古談話会
- 江坂輝彌 1964 「動物形土製品・装身具・植物質遺物」『日本原始美術』2 135～150頁 東京 講談社
- 大野延太郎 1896 「曲玉二就テ」『東京人類学会雑誌』12-128 112～114頁 東京人類学会
- 大野雲外 1916 「原始勾玉の研究」『人類学雑誌』31-1 3～6頁 東京人類学会
- 川添和暁 2009 「愛知県朝日遺跡出土の骨角製装身具類について」『物質文化』86 25～38頁 物質文化研究会
- 川添和暁 2010 「縄文後晩期の岩偶岩版類について—東海地域の事例を中心に—」『研究紀要』11 1～24頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 川添和暁 2011 『先史社会考古学—骨角器・石器と遺跡形成からみた縄文時代晩期—』東京 六一書房
- 川添和暁 2013 「骨角製装身具類からみた晩期前半の社会」『東海地方における縄文時代晩期前半の社会』第1回 東海縄文研究会シンポジウム予稿集 51～64頁 東海縄文研究会
- 清野謙次 1969 『日本貝塚の研究』東京 岩波書店
- 額綱 茂 2002 「表紙の図版の説明」『動物考古学』18 38頁 動物考古学研究会
- 小島俊彰 1983 「有孔球状土製品」『縄文文化の研究』9 141～148頁 東京 雄山閣
- 高橋健自 1916 「石器時代の勾玉に就いて」『人類学雑誌』31-1 26～28頁 東京人類学会
- 樋口清之 1940 「日本先史時代人の身体装飾」『人類学・先史学講座』13・14 東京 雄山閣
- 藤田富士夫 1989 『玉』考古学ライブラリー 52 東京 ニューサイエンス社

報告書など

- 磯谷清市・田端 勤 1975 『豊田市埋蔵文化財調査集報 第二集 縄文1』豊田市教育委員会
- 伊藤和彦編 1990 『大平遺跡発掘調査報告書』尾西市教育委員会
- 大橋 勤・杉浦 知 1974 「神郷下遺跡表面採集の遺物」『伊保遺跡』猿投遺跡調査会
- 岡安雅彦編 1996 『御用地遺跡』安城市教育委員会
- 奥 義次・御村精治・田村陽一 2011 『森添遺跡』度会町教育委員会
- 小栗鉄次郎 1941 「名古屋市昭和区大曲輪貝塚及同下内田貝塚」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告書』19 9～39頁 愛知県
- 加藤岩蔵・齋藤嘉彦ほか 1972 『本刈谷貝塚』刈谷市教育委員会
- 川添和暁編 2001 『牛牧遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 額綱 茂編 2003 『埋蔵文化財調査報告書 44 玉ノ井遺跡(第3・4次)』名古屋市教育委員会
- 齋藤嘉彦 2001 『国指定遺跡 真宮遺跡』岡崎市教育委員会
- 上嶋善治編 1998 『牛垣内遺跡』財団法人 岐阜県埋蔵文化財保護センター
- 鈴木敏則編 1992 『佐鳴湖西岸遺跡(本文編II)』財団法人浜松市文化協会
- 住田誠行ほか 1979 『中村遺跡』中津川市教育委員会
- 谷口和人編 1997 『西田遺跡』財団法人 岐阜県文化財保護センター
- 前田清彦編 1993 『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会
- 贊 元洋編 1993 『白石遺跡』豊橋市教育委員会
- 穂高町教育委員会 1972 『離山遺跡』
- 松井直樹編 2003 『八王子貝塚IV』西尾市教育委員会
- 松井直樹編 2007 『枯木宮貝塚III』西尾市教育委員会
- 森川幸雄編 1995 『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター
- 安井俊則編 1991 『麻生田大橋』愛知県埋蔵文化財センター
- 和気清章 2000 『下沖遺跡発掘調査報告』嬉野町教育委員会

【追記】 枯木宮貝塚では、本稿で取り上げた資料のほかに、3例の土製垂飾類の出土が報告されている(牧ほか1983)。3例の内訳は、2a1類が2点・2a2類が1点で、後者は6a2類の25を連想するような細沈線による文様が施されている。

牧富也ほか 1983 「枯木宮貝塚」『西尾市史自然環境原始古代』802～901頁 西尾市史編纂委員会